

『幻のえにし』

2021年02月05日

石牟礼道子氏の『苦界浄土』を読んだ時の感動は忘れられない。本を勧めてくれた人は盲人の鍼灸師の夫を持ち、カリエスで背中が曲がっていた病弱の婦人だった。彼女は、妊娠したが、どの産院の医者からも出産は無理と言われた。彼女は医者忠告を聞かず、命がけで男児を生んだ。その子は、特別支援学校の教師となって、障害者教育に従事した。

私は『苦界浄土』に魅せられ、石牟礼氏の著作を読み、彼女の鋭い言葉に胸を打たれ、生きるということを考えさせられた。渡辺京二氏が、講演とインタビューをまとめ『幻のえにし』を上梓している。渡辺氏は熊本に在住した日本近代史家で、熊本で、文芸雑誌を刊行する活動をされた。活動の中で、石牟礼氏と知り合い、以来、50年を超える交わりを持たれた。彼女の執筆を支え、水俣病闘争に関わった。渡辺氏ほど、石牟礼氏と一緒に歩んで来た人はいないのではないかと。彼が身近で見た石牟礼氏の姿は、興味深い。豊かな言葉で詩や文章を紡ぐ凄さは周知の通りである。絵も上手であった。沖縄で戦死した人は小さい写真しかなかったので、その写真をもとに葬儀用の肖像画を描いた。その絵を見て、画家が「あん人の方が私より上手だった」と評したそうである。書道も上手であった。書家が、激賞したようで、書も一流だった。歌も高いソプラノで、音大を出た人のように歌った。CDにして売り出せば良かったと言われている。彼女の朗読を聞いた朗読の名手が、「負けた」と言ったそうである。料理がプロ並みで、晩年、パーキンソン病になり体がかなわなくなったが、自分で炊き込みご飯などを作っていた。手仕事も好きで、衣服が乏しい時代、米軍の放出物資の軍服を買って、背広に仕立直したり、近所の人のために裁縫仕事もしていた。「天は二物を与えず」と言うが、あらゆることに秀でていたようだ。

渡辺氏は講演の中で、石牟礼氏の「幻のえにし」という詩の一節、「おん身の勤行に殉ずるにあらず／ひとえにわたくしのかなしみに殉ずるにあれば」について、力説している。水俣病の被害者の支援運動をし、裁判闘争に加勢するのは、あなたたちがやろうとしている事に殉じているのではない。自分の悲しみに殉ずるためにやっている。水俣病患者のためではなく、自分の悲しみのためにしているのだと言っている。確かに、人のためにという時、肩に力が入り、長続きはしない。自分の問題となる時、どこまでも問いつけることができる。石牟礼氏は、水俣病患者の悲しみを自分の悲しみとして捉え、担ったから、あのような言葉を生み出し、闘って来られたのであろう。心に刺さる一節である。

石牟礼氏の写真を見ると、人生の苦難を背負い、闘争している人ではなく、清楚な童女のようなものである。彼女のことを、悲母観音やマリアぐらいに思っている。対談した人は「ありがたや」と拝んで、「感動しました」と言って帰る。東京の大学の先生方も、彼女の笑顔を見て、虜になり、教祖様になってしまう。「ところが僕は違うと思うの」と、渡辺氏は彼女が持っているのは「心の闇」だと言う。「いろいろ話したら、やっぱり、彼女はこの世の虚無を見た人ですよ。だから、今あなたが心の闇と言ったけど、あの人は心の闇があるんですよ。それを分かってほしい」と語っている。近くにいた人の的を射た視点であろう。

写真家の藤原新也氏と対談した『あみだふるはな』の冒頭に、「花を奉る」という詩が掲載されている。詩の最後は「現世はいよいよ 地獄とやいわん／虚無とやいわん／ただ滅亡の世のせまるを待つのみか／ここにおいて われらなお／地上にひらく一輪の花の力を念じて 合掌す」と歌っている。世の虚無を知り抜いたからこそ、一輪の花の力から、生きとし生けるものへの慈しみを発露させるのではないかと。